

事業完了（廃止等）報告書

調査研究期間等

調査研究期間	令和元年7月5日 ～ 令和2年3月13日
調査研究事項	<p>《委託研究Ⅲ》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外国籍の生徒に関すること ・その他既存の夜間中学における教育機会の提供拡充に資すること
調査研究のねらい	<p>中学校既卒者が5名在籍している他、近年来日して間もないため、日本語がほとんど話せない生徒や、卒業して全日制高校へ進学をめざす生徒などが増えてきた。さらに、日本国籍が減少し、中国、東南アジア諸国を始め、シリア、スーダン等の西アジアやアフリカ諸国など、多国籍化がいつそう進んでいる。</p> <p>また、新聞・TV等によって夜間中学が報道される事が増えてきており、各県設置に向けて進んでいる。だが、その役割や存在自体が地域社会の方々に十分周知されたとはいいがたい状況がある。</p> <p>そこで、</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 国籍、年齢、学習経験などがさまざまな生徒に対応できる、教育課程や学習指導法を調査・研究する。 ② 生徒の持つ文化的背景（特に宗教、言語など）を知ることは指導上必須なので、教員の研修、研究を深める。 ③ 生徒同士や生徒と教員間の相互理解を深めるために、学習指導だけでなく、種々の学校行事を行う。特に外国籍生徒が持つ文化的背景を相互理解し合えるような行事を行う。また、どのような内容が適当か調査・研究を行う。
調査研究の成果	<p>本年度も多国籍化が進み、渡日後間もない生徒のニーズに応じて、よりきめ細かく指導する必要性が一層高まった。そのために、まず入学時に個人の課題や目標を明確にした。コースごとにできる限り複数教師を配置し、生徒一人ひとりのニーズに対応できるようにした。また、月に1回情報交換会（生徒指導部主催）を持ち、生徒の進捗・理解度なども、より細かく報告するようにし、教師間での連携と共有を重視した。</p> <p>○小・中学校の国語の学習指導要領を基本とし、日常的によく使用する日本語を更に簡易に表現したのを使い、すぐに役立つことをめざした教材を増やすことで、より興味を持たせるように工夫した。</p> <p>○進学を希望する生徒に対しては、早めに登校させ、学習に取り組んだ。長期の休みには補習を入れ、日頃の不足している教科</p>

(英数を中心に)を補うようにした。課題は複数の目で見ただけだが、本人の意欲もより向上すると思われるので、次年度はローテーションで回す予定である。

○授業参観を6月・10月の2回実施した。今年度は市内の小中学校の教職員にも案内を出し、広く夜間学級を知ってもらおうと募ったところ、合計33名の参加があった。また、単独で(小学校1校)の見学申し込みもあり、少しずつ夜間学級のことを知ってもらえるようになった。

○今年度は、初任者の人権教育研修でも、夜間中学の概要や取り組みを説明した。

○定期的に(月1回)研究委員会(研究部主催)を開き、コース間の国語指導状況や進捗具合を確認し、教職員間で共有するように努めた。

○7月3日(水)に岸和田市社会福祉協議会ボランティアの川村 勝さん他2名の方を招聘し、「車いす・アイマスク」を体験、自助具の紹介、使い方を生徒・職員共々体験した。「車いす・アイマスク」については、相手を信じないと安心して任せられないことを改めて実感した。また、自助具は良く考えられており、近い将来使わざるをえない状況になるかも知れないことを学んだ。

○7月22日(月)にコリアNGOセンター事務局長 金光敏(キム・ゲワンミン)さんを招聘し「多民族共生」についての校内研修を実施した。身近にある野菜収穫を例に、その陰では多くの外国籍の方々が低賃金で働いているという実情を知ることができた。具体的に丁寧に説明をしてもらえ、外国にルーツのある人との共生について、この事実を踏まえて、今後職員がどのように関わっていかなければならないのかを考えていくことができた。

○8月19日(月)に外国人に向けたやさしい日本語の指導法について外部講師 おおさかこども文化センター理事 安田乙世さんを招聘し、校内研修を行った。

- ・「やさしい日本語」をツールとして使っていく重要性を再認識することができた。

- ・「生徒の母語にないものはすべてわからない」ことは、説明しても理解できないものであると思っただけでわからないといけなことを教職員で共通理解した。

- ・日本語の理解が生徒の母語や生活環境によって一人ひとり違

うことがわかった。聞く・話すと書く・読むは別物で、すべてを習得できるのがベストだが、何に重点を置くかを学習者の実態によって変えていかなければならない事を学んだ。

- ・生徒にとっては、日本語という外国語をネイティブの日本人教師が支援している。生徒の発する日本語の言葉に違和感を持つと、その都度、その言葉を教材化した。間違った言葉をゆっくりと発音・反復させて習得させることを大切にした。
- ・教員は「日本語を客観的に見る」ことが大切であり、その感覚が重要であると認識した。

- 10月30日（水）人権学習の一環として、イスラム系であるアフガニスタンの生徒に母国のことについて語ってもらった。生命の危険度が日本とは比べものにならないということや、生活習慣・言葉の問題、低賃金でも働かなければならない現状を知ることができた。
- 11月17日（日）校外学習（南方熊楠記念館、和歌山アドベンチャーワールド）に31人が参加した。バス代を補助することが、経済的支援につながり、例年より多くの参加があった。記念館では貝殻の標本や菌類のことがビデオでも紹介されており、展示の日本語では理解しにくいことも、視覚的に興味を持てたので、よい経験になった。アドベンチャーワールドでは、野生の生態に近い動物の生態をまじかに観察することができた。パンダの餌である笹の葉が、地元の岸和田市から運ばれたものであることも知ることができた。
- 11月29日（金）に岸城中学校の昼間の生徒との相互理解と異文化理解を目的として、グループに分かれて、各国の料理を作った。その後、会食をしながら交流を深めた。
- 12月6日（金）7日（土）の日程で、全夜中研兵庫大会に参加し、「夜間中学の歴史を振り返り、これからの道すじについて考えを深めよう」「義務教育未修了者の基本的人権としての学ぶ権利を保障するために、夜間中学としての役割を明らかにしよう」の主題のもと、全国の生徒さんの生の声を聞くことができた。また、自主夜間中の立ち上げから少しずつ認められ、開設にいたる過程を学ぶことができた。
- 12月11日（水）に音楽鑑賞会を実施した。今年度は、星座に関する話と楽器（アルパ、パンドラム）を組み合わせた会で、理科の要素も取り入れ、2つの楽器の発祥国についても説明を受けることができた。演奏終了後、実際に楽器に触れる機会もあり、よい経験になった。

	<ul style="list-style-type: none">○ 12月6～8日に開催した「人権を守る作品展」では、夜間学級の年間の取組を写真とコメントをつけて展示し（マドカホール）、広く市民に知らせた。○ 12月25日（水）に市教委主催の教育フォーラム（マドカホール500席）では、市民及び教職員に向けて、広く夜間学級の取り組みを知ってもらうために、卒業生1名・在校生4名がリレートークで夜間学級のことを話した。○ 2020年2月26日（水）にフィットネスインストラクター小寺裕之さんを招き「身体の芯から鍛える運動」と題して、生徒・職員と一緒に体験することができた。自宅でも簡単に出来て、継続しやすいもの、年齢問わずに出来るものを中心に行った。体育授業の導入としても使えるので、実践した。○ 学期に1回のペースで全職員が研究授業に参加した。主にやさしい日本語をベースにした授業を今後どのように進めていくかを授業後に研究討議した。○ 人権学習の授業で「自分の母国を語る－平和について－」と題して、生徒の母国の実情を生の声だけでなく、視覚（ディスプレイを使って）からも訴えることができた。授業後の感想では、情動的に気持ちが入っていると感じる文章が多くみられ、自分のこととして理解できるようになった。○ すべての生徒が、1年間の学習の総まとめとして、作文集第42号「希望」を発行した。自分の考えを日本語でまとめることは、日本語能力を身につけることにつながった。また、他の生徒の前で朗読することにより、スピーチ力も上がり自分の思いをより実感できることにつながった。また、他の生徒の思いも知ることが出来てよい刺激になった。
--	---